

三重県総合博物館の展示活動について-行政視察報告-

須藤 格*

はじめに

2014年11月18日から19日の2日間、三重県総合博物館(以下「三重県博」)を視察させていただいた。三重県博は、三重県の自然と歴史・文化を総合的に捉える博物館として、2014年4月に開館した新しい博物館であり、来館する県民や利用者に主眼をおいた博物館活動をその理念や使命として掲げている。展示は、博物館を最も特徴づけるものであり、その館の姿勢を象徴するものである。本稿は、視察結果に基づき、三重県博の展示活動への取り組みを中心に、若干の考察を加え報告するものである。

1 開館までの経過

三重県博の前身は、1953年に、東海地方初の総合博物館として開館した三重県立博物館である。その建物の老朽化やスペース不足などを契機に、1985年頃から県教育委員会で検討が行われ、1993年に「三重県センター博物館(仮称)」の基本構想がまとめられ、建設の準備が進められた。しかし、1998年3月に箱物行政への批判もあり、建設の中止が決定された。その後も、新しい博物館開設への県民・利用者の思いは根強く、請願などのかたちで示され、県教育委員会は2回にわたり博物館整備のための検討を行れたが、整備にいたらなかった。

2007年4月に、当時の三重県知事が、三重の「文化力」を向上させ、未来への投資ともなるような知の拠点として新博物館を整備するため、改めて検討を始めることを明らかにしたことを受け、同年7月、検討の場を教育委員会から知事部局に移して、文化振興の観点から「三重県文化審議会」に諮問を行い、「新博物館のあり方について(答申)」が出された。

この答申をもとに、三重県は、2008年3月、「新県立博物館基本構想」を策定、2008年12月には「新県立博物館基本計画」を策定した。その後、県民や利用者を対象としたワークショップを数多く行い、建

設段階から利用者参加型の開かれた活動を展開し、2014年4月19日に開館した。

開館までの経緯からは、計画策定や設計まではなされるものの建設に至らないという、多くの自治体の博物館づくりと同じような経過を経ているにも関わらず、県民・利用者、学芸員をはじめとした職員の想いが結実した様子がその経過から伺える。

また、基本計画の策定から開館するまでの期間に、「みんなでつくる新博物館」と題し行われた数多くの利用者参加型の活動は、利用者主体の博物館づくりを目指す三重県博の姿勢の表れであると考ええる。

建物の設計・建設工事の段階でワークショップや内覧会等を行った。また、新館の顔となる展示については、詳細設計を進める過程でワークショップを行い、展示の意義やあり方について利用者と考ええる機会を設けた点は、今後、博物館づくりを進めるものにとって必要な視座であり、活動であると考ええる。

2 基本構想・基本計画にみる展示への姿勢

三重県博の基本構想及び基本計画において、展示については次のように謳われている。

■ 固定的でない魅力あふれる展示活動の推進

固定的な常設展示を中心とした従来型の博物館展示のあり方を見直し、展示替えが容易にできる展示をめざします。これにより、三重の自然と歴史・文化を総合的かつ多角的な視点から紹介する展示を行います。

また、学校教育に活用できる展示や、県内外の国宝・重要文化財などの優れた資料を紹介する展示などにも取り組みます。

■ 三重の魅力の発信拠点としての機能充実

県内外の博物館等と連携して館外展示を行うなど、県内の博物館がもつさまざまな資料や情

報を、県内はもとより広く全国に公開することで、三重の魅力を内外に発信する拠点となります。

《具体的な取組の方向》

・三重の特徴や素晴らしさを概観できる基本的な展示機能を確保するとともに、多様な三重の魅力をさまざまな側面から柔軟に紹介する生きた展示活動をめざします。資料を五感で体感できる手法や、屋外における自然展示や敷地周辺のフィールドの恒常的な活用なども検討します。

・県内の博物館や関係機関と連携して、ネットワークを活用した博物館情報の発信システムなど、効果的な情報発信のあり方を検討します。

(「新県立博物館基本構想」(2008)より抜粋)

基本構想の段階では、県立博物館としてのこれまでの展示活動を振り返りつつ、その責務や使命を確認し、「三重の魅力を内外に発信する拠点」としようという姿勢がみられる。

次に、基本計画における展示の位置づけを概観する。展示に限らないが、調査研究、収集保管、教育普及のあらゆる博物館活動を独立したものとしてみるのではなく、館の全体活動のあらゆるレベルで相互に関係するよう理念や使命やマネジメントに関することでその姿勢が謳われている。また、教育普及活動は「活用発信活動～みんなで育む三重の誇り～」として位置付けられ、その中で展示活動についてのべられていることが特徴的である。

○活用発信活動～みんなで育む三重の誇り～

- ・三重の自然と歴史・文化の資産をだれもが幅広く活用し、発信できるようにするために、「交流創造」と「展示」の活動を展開します。
- ・「交流創造」と「展示」の活動は、館からの一方的な発信だけでなく、県民・利用者が主体的に交流や活動できるようにすることによって、新たな創造につなげ、双方向的に発信できるものとします。地域の課題やニーズの掘り起こしを促進し、調査研究活動や収集保存活動などに

フィードバックすることで、さらなる活動を展開します。

○地域に根ざした博物館活動の展開

- ・調査研究活動、収集保存活動を基礎的な活動としながら、その成果を活用発信活動として、展示やレファレンス、フィールドワークなど多様な手段で発信します。

○活用発信の方針

- ・調査研究活動、収集保存活動によって蓄積された三重の自然と歴史・文化に関する資産や情報を、県民・利用者に関き、だれもが気軽に活用発信できるようにするための取組として、「交流創造」と「展示」の活動を展開します。
- ・取組にあたっては、県民・利用者が主体的に交流し活動できるものとし、館内にとどまらない活動として展開させることにより、協創の輪を広げていくこととします。
- ・学芸員などの専門職員が親しみやすく速やかに対応することによって、県民・利用者の活発な利活用を促します。
- ・未来を担う子どもたちが、さまざまな学びや実体験のプログラムと世代を超えた交流をとおして、感性や創造力を伸ばすことができるよう積極的な取組を行います。
- ・とりわけ、「交流創造」を新博物館の特色となる重要な活動と位置づけ、館内に交流創造の中核的な役割を担う「交流創造エリア」を設けて、協創と連携の視点により積極的に活動を展開します。
- ・「展示」を展開するにあたっては、長期的な視野に立った展示計画に基づき進めるものとします。
- ・これらの活動により、一人ひとりの自己実現を支援するとともに、三重への愛着と誇りを育み、地域づくりや地域課題の解決などの新たな創造へとつなげていきます。

○活用発信の内容

【展示】

従来型の一方的な公開にとどまらず、交流創造の取組と連動させながら、県民・利用者との双方向・交流型の活動とすることで、さまざ

まな人びとが出会い、交流し、多様な三重の魅力の再発見と発信ができるものとしていきます。

(「新県立博物館基本計画」(2008)より抜粋)

ここで注目したいのが、展示を、収蔵している資料からの学びの機会の提供にとどまらず、「交流創造」という三重県の地勢や自然、歴史の中で培われた概念を立ち上げ、地域に資する人づくりを目的としていることである。

そして、実際に取り組むにあたり、博物館づくりと活動の指針とすべく、「展示を展開するにあたって大切にしたい点」として展開方法の中で謳っていることも注目したい。

○だれにも楽しめる魅力的な展示とする

- ・子どもから大人までだれもが、わくわく、ときどき感を持って楽しむことができる新しい発見や驚きに満ちた親しみやすく理解しやすい展示をめざします。
- ・新しい総合博物館の特性を生かした自然・歴史などの個別分野やこれらを総合的に捉える活動をもとに、さまざまな視点による展示を複数の展示空間で展開し、これらを更新することにより、三重の多様性の豊かさや三重の持つ多彩な魅力を次々と感じとることができる展示とします。

○さまざまな人が出会い、交流できる展示とする

- ・県民参画による調査研究の成果をはじめ、県民利用者とともに展開する双方向・交流型活動の成果やしぐみを生かして、新たな出会いや交流の場となる展示を展開します。
- ・とりわけ、未来を担う子どもたちの育成に寄与できるようにするために、学校利用への対応や、体験・体感型の手法を取り入れるなど、子どもの学習に配慮した展示を行います。

○地域へと広がる展示とする

- ・諸団体・諸機関や地域と連携した展示活動を館内外で展開させることにより、多様な三重の魅力を知り地域資産を再発見できる場を広げます。

(「新県立博物館基本計画」(2008)より抜粋)

ここで謳われていることは、一見すると博物館として当たり前の姿勢であると捉えることもできるが、展示を担っていく学芸員やマネジメントを行う館長が、開館後に異動等で変わっていくことが予想される中で、このように指針として基本計画の中で謳っておくことは、博物館の継続的な活動を行うために非常に重要であると考ええる。

また、三重県博が博物館活動として取り組み展開していく上で重要だと考えていることは、展示に限らず基本計画の中に指針として謳われている。博物館が継続的に活動のための予算を獲得するために、その根拠を示すことの意義性についてはここでは論じないが、このような文言を基本計画に織り込むことは、博物館を教育行政として継続的に取り組むためには重要であると捉えていることが伺える。

基本計画において検討されている展示の種類や構成は、次のとおりである。

【展示の種類】

- ・基本展示
 - …多様で豊かな三重のあらましを紹介する
- ・テーマ展示
 - …いくつかの展示を組み合わせるさまざまな視点から三重の魅力を発信する
- ・体験展示・分類展示・野外展示・館外展示
 - …「基本展示」や「テーマ展示」のほかに、これらと関連した展示。また、博物館活動を地域に広げる活動としてアウトリーチ活動。

【展示の構成の考え方】

- ・三重の豊かな自然のすがたや人びとの多様なくらしのあらましについて紹介するとともに、三重の歴史・文化を交流という視点から捉え直すことにより、三重の自然と歴史・文化が持つ多様性やそれらが持つ力について考えるきっかけとなる展示をめざします。
- ・学校の社会見学や遠足に対応した内容の展示とするなど、未来を担う子どもたちの育成に寄与できる展示とします。

- ・県民・利用者とともに進める調査研究活動や収集保存活動の成果を取り入れて、随時、更新できる展示システムの導入を検討します。
- ・基本展示と連動する展示として、テーマ展示のひとつであるトピック展示を位置づけ、さまざまな切り口で展開していきます。

(「新県立博物館基本計画」(2008)より抜粋)

展示構成の大きな方向性を謳った上で、博物館観覧者のニーズや目的、レベルの目的の多様性に対応しようとする試みが、展示においても伺えることである。

学校遠足で訪れるパターン、何気なく訪れるパターン、企画展等を観るという目的を持って訪れるパターンといった来館の発意とその年齢構成や社会的属性の多様性に、三重県博としていかに応じようとしているかが伺える。

また、博物館展示における最大の課題といってもいい更新性のなさを解決すべく、「県民・利用者とともに進める調査研究活動や収集保存活動の成果を取り入れて、随時、更新できる展示システムの導入」を謳っていることは、開館後5～10年、もしくはもっと早い段階での常設展示(三重県博では「基本展示」)の展示替えを視野に入れている。

三重県博の基本計画においては、展示の基本設計的な要素も盛り込まれており、「トピック展示」「企画展示」「交流展示」といった個別の展示プランについてもその目的と方向性を謳っている。

なお、基本計画の中で、展示について述べた後、来館者をいかに博物館活動へのいざなっていくかについて細かにその学習プログラムについて詳細に例を挙げて述べられている。

そのほか、いわゆる「博物館疲れ」や「博物館はすごいところがあるところ」、「変わり映えがしないから一度行けばよい」といった否定的なイメージを払拭すべく「魅力や楽しみを高めるサービス展開」も取組として謳っていることは注目される。

そして、基本計画の最後に、「持続的で着実な運営のための取組」が述べられ、欧米の博物館では当然のことではあるが、いわゆる自主財源を獲得してい

く姿勢として、「運営資金については、国や関係機関等の補助制度の活用や、民間からの寄付金、広告収入などの多様な資金調達を工夫します。」と謳っていることも、国内の博物館においては稀有なことであると考ええる。後述するが、展示活動としてそれを具体化していることは取り組みとして注目される。

以上のように、利用者に対する三重県博の姿勢を、基本計画において強く打ち出していることは、多くの行政計画がステークホルダーである市民や利用者とともに作り、進めていくことが是とされる中で、行政計画づくりの形式に則ったものではなく、三重県博のこれまでの博物館活動に裏付けられた強い意志の表れであり、開館後も、実際に活動する館長や学芸員、関係行政職員、市民ボランティアといった博物館活動に関わる人々の拠り所となるものになっていくと考える。

3 展示活動の実際

ここでは、基本構想や基本計画で謳われた展示活動が、実際の展示設備や展示物としてどのように表されているのかについて、視察させていただいた結果を踏まえ報告したい。なお、三重県博は企画展示室及び広大な野外展示空間を備えているが、本稿では「エントランスエリア」、「学習交流スペース」、「こども体験展示室」、「基本展示室」、「交流展示室」、「三重の実物図鑑ルーム」、「レファレンスカウンター」を中心に報告する。

(1) エントランスエリア

「誰もが気軽に立ち寄れる空間」と「三重の魅力の楽しさ」のための空間として、エントランスエリアは位置づけられている。

正面入り口を入り、エスカレーターを上ると、来館者を迎えてくれるのが象徴展示としてのミエゾウの骨格標本である。このような象徴展示には多くについては賛否両論あり、どちらかという批判が多いように感じているが、利用者が博物館に求めているものに、「強い印象」「思い出」というものがある中で、三重県博建設中に敷地内から発掘された化石標本は有用な資料であり、また象徴としての役割を果

たしている。また、展示室前の空間構成としては非常にベージュを基調とした色彩構成とライティングによる落ち着いた空間構成で、利用者を圧迫しない空間づくりがなされている。



写真1 エントランスエリア



写真2 図書コーナー（手前）子ども体験展示室と一体性をもったエントランスエリア



写真3 ミュージウムカフェ内にはオオサンショウウオが展示されている（写真奥）

なお、2015年1月10日（土）から3月8日（日）にかけて開催された、婚姻に係る服飾文化や儀礼等の変遷を紹介した企画展「ふたりのウェディング事情」の会期中には、このエントランスエリアで「博物館ウェディング」が行われ、応募者15組の中から選ばれた1組のカップルが結婚式を挙げた。式の司会進行は三重県知事が務めた。博物館の価値創造とあり方の探求、財源確保などの取り組みとして米国ではすでに行われている取組を三重県博が行ったことは注目すべき活動である。

(2) 学習交流スペース

「三重に関する興味や関心、目的に応じた県民・利用者」の「学習や研究、グループ・団体等の活動と交流の舞台」として、図書コーナー、資料検索のため端末設置、打合せができるテーブル等がはいちされ、博物館が公民館的機能ももつことで多様な利用形態を可能としている。このような他の社会教育施設が有する機能を博物館が重複して持つことへの批判はあるが、博物館と出会う機会をいかに多く用意できるか、という観点は、今後の博物館と利用者のあり方を考える上で必要な視座であると考えられる。



写真4 円形の図書コーナー



写真5 収蔵資料・図書・文化財等が検索しその情報をプリントアウトすることができる端末（写真手前）をレファレンスコーナー（写真奥）と近接したところに設置

(3) こども体験展示室

「子どもたちが、やってみる・しらべる・のこす・つたえる、を体験できる展示を通じて、博物館の楽しさを知ること」ができるのが本展示室である。日常生活にとける博物館体験の少なさが、「博物館離れ」や「使い方が分からない」、「価値が分からない」、「一品豪華主義の展示」につながっていると考えられるが、それを改善する三重県博の取り組みとして、博物館とはどういうところか、なぜそのようなことをするのかを、幼児期から楽しむことで知ってもらおうという試みが展開されている。本展示室には、エデュケーターとして学芸員が配置されている。訪問した際、数組の親子連れが、就学前児童を連れて訪れていた。



写真6 ガラスを多用し開放的な入口



写真7 ハンズオン展示を多用した展示室室内



写真8 「むかしの暮らし」展示コーナーの参加型展示

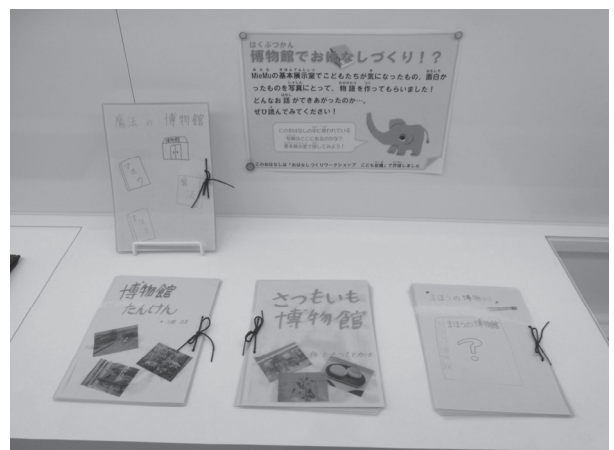


写真9 展示を観て「自分だけの博物館づくり」のワークショップで作られた子どもたちの作品

(4) 基本展示室

「常設的に三重の特色である自然と歴史・文化の『多様性』やその魅力を分かりやすく紹介し、『三重ってすごいところ!』を発信」することテーマに、「三重」「地史」「自然」「くらし」「歴史」「博物館からのメッセージ」で構成されている。展示手法としては、ハンズオン、映像展示、静止展示、集合・単体展示などあらゆる手法や技術を用いおり、分野も横断的であり、また、「驚異の部屋」(Wunderkammer)的に三重の多様性を表現している。

中でも注目したいのが、基本展示室出口にある「博物館からのメッセージ」である。「展示を見て何を感じたか?」を問いかけ、付箋や設置端末に入力し、他の利用者と観たことを共有できるようになっている。また、設置端末にはさまざまな問いかけ、例えば「今から出かけたい三重の場所」という問いがあり、それに対し利用者が入力し、共感した人が Facebook をはじめとした SNS で行われている「いいね(like)」を行うことができる。博物館の展示を見て、三重に対して思ったことを他の利用者といかにしたら共有できる試みが行われている。



写真10 地域遺産紹介、触れる地形模型(写真手前)



写真11 岩石標本と一緒に並べられた野帳など



写真12 現在の三重を統計で紹介



写真13 谷戸のくらしを、1次・2次資料で構成し紹介。端末で多くの聞き取り調査の映像を観ることができる。



写真 14 参加型展示（県民が撮影・所蔵している資料
を端末で紹介し、近現代～現代の展示を補完）

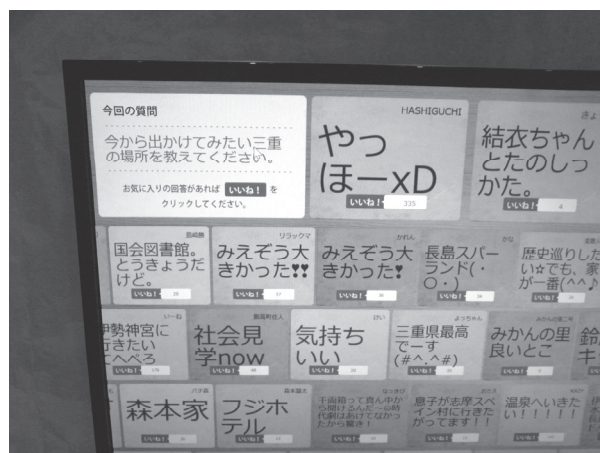


写真 17 共有展示コーナーのディスプレイ

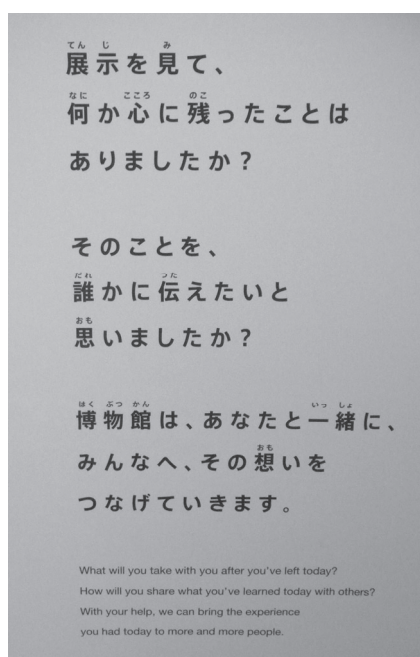


写真 15 展示室出口にある館からのメッセージ



三重県博には多くに企業が協賛として名を連ねている。その企業が、自社の企業活動を紹介するとともに、地域を紹介したり、CSR 活動を紹介したりしており、地域の産業を取り込んだ展示活動として注目したい。



写真 18 企業や団体向けの交流展示室



写真 16 共有展示コーナー（展示をみた感想が付箋や
端末に入力されている）

(6) 三重の実物図鑑ルーム

「昆虫や植物、動物、伝統工芸品など三重の自然と歴史・文化に関する基本的な資料を図鑑のように展示」している。可変性の高い分類展示と収蔵展示の手法を用い、観覧者に学びを委ねた実物図鑑的展示を行っている。

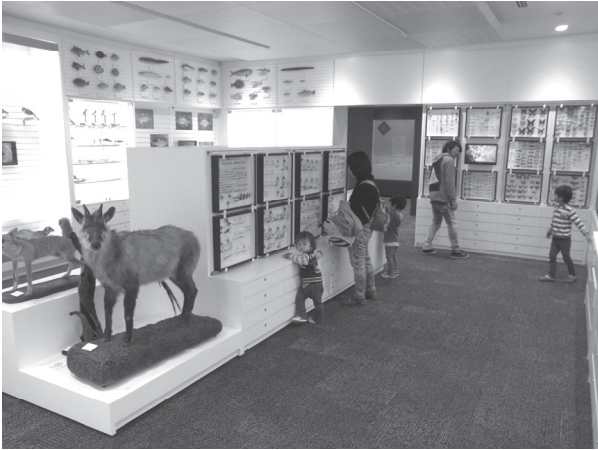


図 19 標本を中心に展示を構成。多くの親子連れが訪れていた。



写真 20 資料が収蔵されている引出しをあける幼児



写真 21 三重を象徴する資料を図鑑的に展示

(7) レファレンスカウンター

「学習交流スペースの窓口として、三重のさまざまな話題に関する問い合わせや相談など、県民・利用者のみなさんの活動や交流をサポート」するコーナーとして設置されており、展示活動ではないが、

資料閲覧対応や文献に関するレファレンス、ワークショップや市民ボランティアの受付など、博物館に興味をいただいた利用者が、博物館の利用から活動への参画へと移行を支援する場となっている。博物館が展示やワークショップだけで終わらないための大切な機能であると考え、コーナーにはエデュケーターの学芸員や司書が配置されている。



図 22 ホワイトボード（壁面）にはイベント情報や連絡事項が手書きで書き込まれており親近感がある

さいごに

ICOM の『博物館組織 その実際的なアドバイス』によると、「展示とは、見せること、陳列すること、目に触れるようにすることであり、多くの国語において、展示とは、ものを選び意味のある表示、目的のある陳列を意味している」と説いている。資料を目的に沿って「配列」し、意味を付し、示し、目に「見える」ようにすることである。ただ「陳列」するのではなく、「展げて示す」ことであり、そこに意味と目的をもって、人に見せようとする意識があり、コミュニケーションの一つの形態であると考え、このような、博物館独自の方法がについて、議論や試みは続いており、それには各館の理念や使命、目的がはっきりとしていることが求められるのはいうまでもない。

展示活動だけを、調査研究や収集保管との連続性や、教育普及の他の活動との関係性から切り離して語ることはできない。しかしながら本稿では、三重県博の理念や使命がどのような展示活動として行われているかに注視し、その一つのかたちとして報告

した。

また、言うまでもないが、博物館活動は終わりのなき試みであり、開館した建物や展示設備に収斂されたものではない。今後、三重県博が標榜するように「三重がもつ多様性の力」を資料や活動をとおして紹介していく活動を継続的に行う中で培われ、館と学芸員、利用者によって育てられていくものであると考える。

本稿では、その終わりのなき試みに対し、三重県博がどのように取り組んでいるのか、また、展示活動をどのように展示設備に反映させたかを概観した。今後、自身の博物館活動、展示活動の視座としたい。

謝辞

新館として開館して間もない中、また、同時期に開催された全国博物館大会の幹事館として大会運営に非常に多忙を極める中、視察にご協力いただいた三重県博の学芸員の皆様にこの場を借りて心から感謝申し上げます

* 茅ヶ崎市教育委員会社会教育課茅ヶ崎市文化資料館
学芸員

参考文献・資料

「新県立博物館基本構想」三重県, 2008

「新県立博物館基本計画」三重県, 2008

三重県立総合博物館

<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/>

「三重県立総合博物館展示案内 2014」三重県立総合博物館, 2014

「博物館組織 その実際のアドバイス」国際博物館会議日本委員会, 1965

布谷知夫「博物館の理念と運営—利用者主体の博物館学」雄山閣,

加藤有次「博物館学概論」雄山閣, 1996

加藤有次ほか「新版・博物館学講座第9巻 博物館展示法」雄山閣, 2000

デビット・ディーン「美術館・博物館の展示」丸善, 2004

鈴木真理「改訂 博物館学概論」樹村房, 2004

倉田公裕・矢島國雄「新編 博物館学」東京堂出版, 1997

全日本博物館学会編「博物館学事典」雄山閣, 2011